高蔵寺どんぐりｓ

ふれあいだより

NO 133

2022.7.1

ＮＰＯ法人　高蔵寺どんぐりｓ発行（☎090-1566-7767）

３年ぶりに「どんぐりｓ」定時総会開催

里山育み「活気あふれるまち」めざす

高蔵寺どんぐりs理事長・堀内　泰

コロナウイルスは、やっと峠を越えたようである。5月22日、久々に会員が一同に介して、第15回「高蔵寺どんぐりｓ」定時総会が東部市民センターで開催され、2022年度運動方針などを採択した。やはり顔を合せながら話しあうのは、お互い気持ちが通い合い、大事であることを改めて感じた。ところが、息つく間もなく、今度はウクライナ問題が世界を震撼させ、人々の暮らしの中に深刻な影響を及ぼしている。そんな中でも、どんぐりｓは今期も、生き甲斐と活気あふれる「まちづくり」を掲げ、人と人が繋がる交流、イベントを一層大事にして取組むことを確認しあった。

環境整備では、街の中にある自然のシンボル高森山の里山づくりを一層進め、春日井市や高蔵寺まちづくり(株)、及びＵＲ都市機構中部支社と共有する未来プランの実現を目指し連携を深め、後継者づくりにも力をいれていく。

玉野地区では、遊休地利用の「活き活き楽農会」が、生き甲斐の野菜作りを楽しみながら、環境保全活動にも精力的に励んでいく。玉野ふるさと農園（農用地利用改善組合）からの信頼を得て、意思疎通がさらにスムーズになり、目的の地域コミュニティづくりは順調である。今期より、「かすがい環境まちづくりパートナーシップ会議」（市民・事業者・市の三者協働）に加盟した。市内約２０団体の仲間と住みやすい環境を維持できるまちに貢献していきたい。

すまい相談・生活相談会やどんぐりｓカフェは、前期、コロナ禍でたびたび中断したが、今期は、予定通り開催できそうである。悩みや困りごとに耳を傾け、また、幅広く暮らしに役立つ講演会やセミナーを催す。庶民的な楽しい企画づくりも行ない、多くの住民が少しでも元気になれるよう心掛けていきたい。

役員会から

●「どんぐりsカッフェ」「住まい困りごと相談」「ハート・ほっと・ルーム」など当会の活動の拠点となっている「東部ほっとステーション」の利用が危なくなってきた。春日井市が部屋を借り上げ１０の市民団体が無料で活用。運営は１０団体とニュータウン創生課で構成する運営委員会で協議する。●他の市民団体と比べ優遇し過ぎとの意見が出ている。廃止か有料にするべきだ、というのだ。市は来年度に向けて改革案を検討している。有料になれば各団体の活動はかなり制約を受ける。当会のほか、「子育て支援」などのサービスもできなくなる心配がある。加盟団体は７月１８日に「ウクライナ避難民支援チャリティー・フリマ」を開催し、同ステーションの存在意義を市民に訴える。　（明賀　雄二）

すまい困りごと無料相談

●電話または直接面接会場にお越しください
☎080-5297-8956（長谷川）
面接相談会日;7月16日（土）8月27日（土）
（いずれも13：30～16：00）
会 場；東部ほっとステーション
（サンマルシェ南館1階）

ハート・ほっと・ルーム

日　時；7月24日（日）、8月28日（日）
（いずれも13：30～17：00）
会　場；東部ほっとステーション
参加費；無料
連絡先；☎090-6330-4393(浪川)

6月の「どんぐりsカフェ」から

ブラブラしてラブラブのまちへ

6月18日の「どんぐりｓカフェ」は、「ブラブラまつりのススメ」と題して、同まつりの提唱者である豊田洋一中部大学名誉教授の講演を聴いた＝写真。

「普段は住宅ばかりのまちが、ある日カフェやギャラリーやピザ屋さんに変身してまちは少しにぎやかになる。そして小さな出会いがそこかしこにあって、それが普段になることを夢見ている」そんなコンセプトで10年前に押沢台北町内で始まったブラブラまつり。2018年に「住まいのまちなみコンクール」で国土交通大臣賞をいただき、今では市外からバスの団体が見学に来るようになった。

自宅の庭やガレージを開放して、住人が思い

思いの出し物を提供する大人のお店屋さんごっこだが、豊田氏自身初めは奥様と町内会の壁が立ち塞がったと言う裏話も。

後半の第二部では実際に出店された方を囲んで、対話と質問コーナーで盛り上がった。新たに市内外の３つの町内で実施されているが、ブラブラしてラブラブのまちが今後増えていくことを期待したい。　（**山口　正恵**）

私の朝・昼・晩

コロナで失ったもの、得た教訓

コロナに翻弄されて２年半が過ぎた。この間、個人的には掛け替えのない友人を７人も失い、死因がコロナではなかったものの、病院への見舞いも、葬儀への参列もままならず、肝心な時に会えずに終わってしまったことが悔やまれる。また飲み会やランチ会が全く無くなってしまい、今思えば、楽しく懐かしく、そして有意義なコミュニケーションの場であったことを思い知らされ、沢山の方と疎遠になってしまった空虚さを味わいつつ、これが当たり前にならないことを願っている。

そんな中で、私なりに得た教訓もある。人と会う時間が減った分、考える時間と、考えたことを実践する時間が出来たことである。コロナ前は、健康が第一と頭では思い、何が必要か分かっているつもりでも何もして来なかった。時間が出来たことで、健康に関する書物等で知識を得た結果、散歩やストレッチが日課となり、最近のマスクを外しての散歩は爽快で、無心になって考える貴重な時間となっている。そして何より大切なことは精神面での充実であり、人との比較ではなく自分に合った無理のない生き方をすることで、自己肯定感を高め、免疫力の向上に繋がると考える様になった。「もう、歳だから・・・」とか「・・・してもしかたがない」といった言葉は禁句にしたい。　（**浪川　昇三**）

昆虫食、栄養も可能性も豊富に

皆さんは、昆虫食と言えば何を想像されるだろうか。5月5日の「グルッポふじとう祭り」で「食用昆虫とSDGs」に参加し、高崎経済大学の飯島明宏教授の話を聴き昆虫食の認識を新たにしました。世界人口は2050年には97億人に増加すると予想され、食料問題は待ったなしの状況ですが、畜産業は限界に来ていると言われています。

その中でコオロギは同量の牛肉と比較した場合1/12の餌で育ち、しかも雑食性なので現在問題となっている食品廃棄物で育てることができる。さらに驚いたのはその栄養価である。たんぱく質は家畜肉より多く、DHA、ビタミンB2、B12、カルシウム、鉄分も豊富なのだ。

ただ、消費者に受け入れられるには、食べず嫌いを克服しなくてはいけない。食べやすく粉末にすることが必要と考え、春日井市のファインシンター社は粉末化技術で昆虫食分野に挑戦しコオロギラーメンなどの開発や食品業界への提供を進めている。会場ではコオロギコーヒー、コオロギラーメン、タガメサイダーなどの商品が販売されていました。私たちが、普通に昆虫を食べる生活は、案外そこまで来ているのかもしれません。　（**山口　正恵**）